

妙心尼御前御返事

建治三年五月四日 五六歳

種々種々の物の給びて候。たうじは当時農暇のう時にて人のいとまなき時、かやうにくさぐさのもののども、送をくり給びて候事、いかにと申すばかりなく候。これもひとへに故入道殿の御別わかれのしのびがたきに、後世の御ためにてこそ候らんめ。ねんごろに後世ごせをと甲ぶらはせ給ひ候へば、いくそばくうれしくおはしますらん。と訪ふ人もなき草むらに、露しげきやうにて、娑婆世界さばせかいにとゞめをきしを幼さなきものなんどの、行方聞ゆくへきかまほし。

あそぶの蘇武がこく胡国に十九年、ふるさとの妻と子との恋こひしさに、雁の足につけし文ふみ、あへのなかまろ安部中麻呂が漢土にて日本へかへされざりし時、東よりいでし月をみて、あのかすがの春日野の月よとながめしも、身にあたりてこそおはすらめ。しかるに法華經の題目をつねはとなへさせ給へば、此の妙の文字じ御つかひに変ぜさせ給ひ、或は文殊師利菩薩、或は普賢菩薩、或は上行菩薩、或は不輕菩薩等とならせ給ふ。ちんしが陳子鏡鳥かゞみのとりのつねにつげしがごとく、蘇武が妻めの礎きぬたの聞こえのきこへしがごとく、娑婆世界さばせかいの事をめいど冥途につげさせ給ふらん。

又妙の文字は花のこのみとなるがごとく、半月の満月となるがごとく、変じて仏とならせ給ふ文字なり。されば經に云はく「能く此の經を持つは則ち仏身を持つなり」と。天台大師の云はく「一々文々是真仏なり」等云云。妙の文字は三十二相八十種好円備せさせ給ふ釈迦如来にておはしますを、我等が眼つたなくして文字とはみまいらせ候なり。譬へば、蓮はちすの子の池の中にお生ひて候がやうに候。はちすの候を、としよりにて候人は眼くらくしてみず。夜よるは影かげの候を、暗やみにみざるがごとし。されども此の妙の字は仏にておはし候なり。又、此の妙の文字は月なり、日なり、星なり、かゞみなり、衣なり、食なり、花なり、大地なり、大海なり。一切の功德を合はせて妙の文字とならせ給ふ。又は如意宝珠のたまなり。かくのごとくしらせ給ふべし。くはしくは又々申すべし。

五月四日

日 蓮 花 押

伯耆はわき殿申させ給へ